平成１６年度半島地域活性化優良事例概要

道府県名	地域名	団体名	伊豆アドベンチャーレース実行委員会	申請回数	初	継続年数	6年目
静岡県	伊豆中南部（松崎町ほか8市町村）	事例名	伊豆アドベンチャーレース				

[概　要]

伊豆半島に「活気」を取り戻すために何か出来ないかという「伊豆新世紀創造祭」の基本理念に基づき、各市町村が団結した結果、伊豆の大自然を活用したアドベンチャーレースといった新規ソフトを生み出した。

住民主導のイベントとして、平成１１年のプレ大会から開催されており、平成１６年で6回目となる。このアドベンチャーレースは、女性1名以上を加えた3名が競技者となり、伊豆の大自然を活用したコースをマウンテンバイクやシーカヤック、トレッキング、キャニオニング等、コースごとに指定されたアイテムを駆使してゴールを目指す”マルチアウトドアスポーツ”である。

平成１２年から始まった地元開催によるシーカヤックマラソンは、毎年１５０艇程が参加し、一年を通じてのリピーターも増え、シーカヤックの専門店も空き店舗を利用してオープンし体験教室を開催するなど、観光交流客の増加、関連作業にも大きな影響を与えている。また、「冒険修学旅行」と称して、中学生を対象としたカナディアンカヌーや地引網、櫓漕ぎ等の体験学習の受け入れも始め、平成１６年においては、全国から9校を招き、地域間交流の促進を図っている。

平成１２年には、新しい伊豆の魅力の発進や新しい観光システムの創造等を目指した「伊豆新世紀創造祭」において総合賞を獲得したところであり、さらには、地域の合言葉である「伊豆はひとつ」の体現を目指すべく、年々コースエリアを拡大し、参加チームも増加してきたところである。平成１６年6月、国立公園や道路使用の円滑化、手続き改善等のために、構造改革特区域計画及び地域再生計画を県と伊豆9市町村合同で申請し、認定を受けた。

このことにより、国内初の三日間のノンストップレースを開催することが可能となり、世界にも通用する本格的なレースへの展開が可能となった。

今後、静岡県の様々な地域を本レースに取り入れることで、伊豆、富士山を含めた静岡県の国外への知名度の向上を図り、将来的には国際大会の開催を目指している。

[選定基準に照らして]

① 先進性、モデル性

伊豆の大自然を利用したスポーツ大会などのイベント等の開催や都市と農村との交流、コミュニティ活動の推進などにより、観光振興ひいては地域経済の活性化、地域雇用の創出を図っている。

② 地域の振興方針との整合性（市町村の戦略的・重点的プロジェクト）

一年を通して、豊かな自然を対象にした事業を展開する事により、交流客数の増加が図られるとともに、観光関連産業を中心とした経済波及効果が図られる。

③ 自主的、主体的な取組

地元有志が中心となり、実行委員会を組織し、大会スタッフは地元を中心とした２００名程度のボランティアにより運営されている。

④ 広域的視点での地域特性を生かした創意工夫

当レースを核として、シーカヤックマラソンや冒険修学旅行が開催されたり、シーカヤック専門店がオープンするなど、観光交流客数の増加にも寄与するなど、様々な取り組みが生み出され、関連産業へ波及している。

⑤ 地域住民の積極的参加（市町村との連携）

レース開催に向けて、各市町村が連携し地域住民や道路利用者等と準備が進められ、大会当日のスタッフには、２００名程の地域住民が参加している。

[その他]

① 事業の経費・財源

補助金、スポンサーからの協賛金及び参加費等

② 表彰歴

伊豆新世紀創造祭総合賞、スポーツ部門賞（平成１３年1月）

平成１６年度半島地域活性化優良事例

伊豆中南部地域
（静岡県松崎町ほか８市町村）
伊豆アドベンチャーレース実行委員会
伊豆アドベンチャーレース

松崎港から２３チームがスタート

松崎海岸からシーカヤックに乗継

河津七滝のキャニオニング（滝下りと垂直降下）

地元住民による猪鍋のサービス

石廊崎でゴール。完走は２３チーム中２チーム

平成１６年度半島地域活性化優良事例概要

道府県名	地域名	団体名	柳谷自治公民館（やなぎだに）	申請回数	初	継続年数	8年目
鹿児島県	大隅(串良町)（おおすみ くしらちょう）	事例名	行政に頼らない「むら」づくり				

[概　要]

２０年後には高齢化率５５％程度になると予想されている串良町柳谷集落では、将来自治活動が困難になる時期が到来するとの危機感から、自治公民館長を中心に、集落民の経済的負担がなく安心して暮らすことのできる地域づくりを目指して、地域住民総出で各種事業に取り組み、収益事業により行政や補助金に頼らずに環境や福祉など幅広い分野にわたって総合的な視点で「むら」興しを行っている。

同集落の活動は新聞などで紹介され、広く地域づくりの先進地として知られるようになり、当該地域一帯を活性化し、条件不利地域でも「やればできる」との思いを浸透させている。

○　土着菌を活用した環境対策

平成１２年4月から土着菌を活用した畜産ふん尿悪臭防止や生ゴミ処理、循環型農業の育成など独自の環境対策に取り組んでいる。

・平成１４年3月に土着菌を増殖する手作りの土着菌センター（１００㎡）を建設

・牛、豚、鶏等の飼育農家では米ぬか原料の土着菌を給餌しているため、集落から畜産悪臭が減少

○　生ゴミ搬出「ゼロ」と自然農家

生ゴミを全量自家処理するために、生ゴミ処理機を全戸に配布、これは、土着菌を入れるだけで堆肥の発酵を促進する上、悪臭防止にも抜群の効果をあげている。また、土着菌を活用した有機質完熟堆肥で土壌改良を図り、作物の根圏に活力を吹き込み、完全無農薬栽培による自然の農業復活に挑戦中である。

○　まさかのときの介護・防犯緊急警報装置の設置

高齢化率３０．４％の柳谷集落では、高齢者の孤独死対策が急務であることから、集落内の主要道路に緊急警報装置を設置している。これにより、独居高齢者に不測の事態が生じたときに、集落民が対処・介護することが可能となる。

○　行政に頼らない「感動の地域興し」

自主財源確保のために1haの遊休農地でさつまいもを生産し、その収益金を土着菌センターの運営資金、緊急警報装置の設置や青少年の活動資金に活用している。また、さつまいもを原料として焼酎「やねだん」を委託生産し好評を博している。

○　手打ちそば食堂を開業

柳谷を訪れる人々に集落をアピールするために特産品づくりを目指し、手打ちそばに取り組んだ。平成１６年5月に営業許可を取得し、集落の主婦が中心となって週４日営業し、その収益は地位の福祉事業などに充てている。

[選定基準に照らして]

①　先進性、モデル性

串良町には８６の自治公民館があるが、その中で柳谷自治公民館では先駆的活動を数多く実施していることから、広報紙を通して町内に情報提供している。また、新聞やインターネットサイトで紹介されるなど、町内にとどまらず広く地域づくりの先進地として認知されており、年間１，０００人以上が研修視察に訪れたり、韓国やベトナムから研修生を受け入れた実績もあり、半島地域活性化の一つのモデルとなるものである。

②　地域の振興方針との整合性（市町村の戦略的・重点的プロジェクト）

大隅地域半島振興計画の振興方策である「地域の個性が響きあう、躍動とやすらぎの郷」の実現を目指し、創造的で個性豊な地域づくりを進めており、県内外からの視察も多く、地域活性化の機能の一つとして地元の期待は高い。

③　自主的、主体的な取組

地域住民は、自分たちの地域は自ら活性化していこうとの意思のもと、小学校から高齢者の方がたまで年齢を問わず幅広い層の地域住民が計画立案・協議し、その実現に向けて積極的に行動している。その活動の具体的内容としては、土着菌を活用した畜産ふん尿の悪臭除去などの環境対策、独居老人宅への緊急通報装置の設置など、すべての地域住民が活躍できる場を数多く設け、住民主導の地域づくりを進めている。

④　広域的視点での地域特性を生かした創意工夫

柳谷地域は高齢化が進行している地域であるが、多くの高齢者に地域イベントへの出番を提供することで、地域住民との連携が図られている。また、農地を借り上げて生産したさつまいもで焼酎を委託製造し、その販売権を取得する「焼酎特区」の申請も視野において活動を行っている。

⑤　地域住民の積極的参加（市町村との連携）

地域住民に「自分が主人公だ」といった意識を持たせ、活躍する場を設けることを原点として活動を行っている。また、強制的に参加を募らず、自然に住民が参加する自主総参加型の地域づくりを進めている。

[その他]

①　事業の経費・財源

事業収入、活動補助金等

②　表彰歴

日本計画行政学会第8回「計画賞」最優秀賞（平成１４年１１月）

「立ち上がる農山漁村」政府農村モデル地域選定（平成１６年8月）

平成１６年度半島地域活性化優良事例

大隅地域（鹿児島県串良町）
柳谷自治公民館
行政に頼らない「むら」づくり

６月、10月に植え付けたさつまいもの収穫。
収益は地域の福祉事業などに充てている。

土着菌を活用した畜産ふん尿悪臭防止や生ゴミ処理など独自の環境対策に取り組んでいる。

平成16年５月より手打ち蕎麦食堂の営業許可を取得。地域の主婦が中心となり、週４日営業している。

緊急介護を必要とするときに、枕元のスイッチを入れると、主要道路に取り付けてある赤色灯が回転し、異常を知らせるシステムになっている。

情操教育のためにと、郡内で活躍している演奏家を中心に野外コンサートを実施。

平成１６年度半島地域活性化優良事例概要

道府県名	地域名	団体名	3DAY　ROAD熊野実行委員会	申請回数	初	継続年数	6年目
和歌山県	紀伊(新宮市)	事例名	「3DAY　CYCLE　ROAD熊野大会」				

[概　要]

本年7月に世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」として登録された紀伊半島南部に位置する熊野地域を舞台に、地球環境にやさしい自転車の普及と地域の活性化を目的に三日間にわたって繰り広げられる自転車レースである。紀伊半島南部の県境を越えて三重県、奈良県、和歌山県の三県にまたがって開催される広域連携イベントであり、海外選手も含めて全国各地から集まるトップレベルの選手とコース周辺の地域住民や地元企業による多数のボランティアの参加により、回を重ねるごとに大会に寄せる地元の期待や評価は高まっている。

更に、開催コンセプトとして「地域の活性化に寄与すること」を明確に打ち出しており、単なる自転車競技ではなく、健全なスポーツ精神の育成と、広く地域に密着した取り組みとして、紀伊半島地域の活性化に今後も大いに貢献することが期待されている。

地元での認知はもとより、自転車業界内での認知やレースとしての位置づけも回を重ねるごとに年々高まっている。テレビ、マスコミの取材も増え、本大会をモチーフにした漫画も連載されるなど、情報発信効果も大きい。

[選定基準に照らして]

① 先進性、モデル性

三県にまたがり開催されるという広域性、地域の活性化をコンセプトにした民間主導型のイベント、それを行政の長や地元国会議員等が大会役員としてバックアップするという、それぞれの役割を担いながら多くの人々が関わりを持ち交流を図る。

② 地域の振興方針との整合性（市町村の戦略的・重点的プロジェクト）

紀伊半島地域の中でも、特に交通整備や産業振興を必要とする地域であるが、今年7月に世界遺産登録されたことで、町の活性化に向けた住民意識が高まっており、このような全国規模の大会が毎年開催されることは意義深いことである。

③ 自主的、主体的な取組

実行委員会は、委員長をはじめ全員が民間の人間で構成されており、行政関係者は関わっていない。開催にあたっては、地域住民や地元企業を中心に多くのボランティアが自主的に参加している。

④ 広域的視点での地域特性を生かした創意工夫

当初は三重県と和歌山県の２県を舞台に開催していたが、世界遺産登録の気運を背景に平成１４年より奈良県も加わり、以前にも増した広域的取り組みとして地域に定着してきている。

⑤ 地域住民の積極的参加（市町村との連携）

コース周辺の地域住民による多くのボランティアスタッフは大会運営上重要な存在であり、地元企業の支援体制や警察・行政の協力も仰ぎながら、多くの地域住民が連携を取り合い運営している。

[その他]

① 事業の経費・財源
　参加費、県補助金、助成金等

② 表彰歴
　なし

平成１６年度半島地域活性化優良事例

紀伊地域（和歌山県新宮市）
3DAY ROAD熊野実行委員会
3DAY CYCLE ROAD熊野大会

地元のラジオ放送で大会ＰＲ

スタート直前の多くの参加者たち

イベント広場で行われた閉会式